

大蔵卿の味—東京劇場を見て—

中内蝶二

〈出典：「演芸画報」昭和6年5月号〉

『大蔵卿』と云う名題で今日舞台に演ぜられている檜垣茶屋から曲舞、奥御殿の三幕は実は『鬼一法眼三略巻』の一部であります。『鬼一法眼三略巻』は、享保十六年の九月、大阪竹本座の手摺にかけられた操芝居で、作者は文耕堂と長谷川千四、もとは五段物の浄瑠璃でありました。即ち序と二段目が弁慶の生立と吉岡鬼次郎夫婦の諸国遍歴、三段目が菊畑、四段目が大蔵卿のくだり、五段目が五条の橋の牛若千人斬と云う順序であります。

この浄瑠璃が歌舞伎狂言に移されたのは、翌くる年の享保十七年、大阪の嵐座が最初だと云うことで、江戸の舞台に上されたのは、文化十四年五月の桐座が初めてであります。そうして、今日度々舞台に上演されるのは、三段目の『菊畑』と、四段目の『大蔵卿』とだけで、而かも、菊畑を上演する場合には、やはり『鬼一法眼三略巻』と本名題を掲げるのに、大蔵卿の場合は、本名題を棄てて、別に『大蔵譚』と云う新しい名題を掲げるのが通例となりました。

尤も、これは要領を得た取扱い方で、『菊畑』の方では、鬼一法眼を中心として、牛若の虎蔵も出て来る。鬼三太の智恵内も出て来る。敵役の笠原湛海も出て来る。これ等が法眼の娘の皆鶴姫にからんで、六韜三略の巻を手に入れようとする一段だから、『鬼一法眼三略巻』と云う名題に尤もよく適っています。そこで、『菊畑』がこの本名題を独占しても、何処からも苦情は起らない道理ですが、さて、『大蔵卿』のくだりばかりを演ずる場合となると、『鬼一法眼三略巻』では、成程名題のはまりが面白くないことになります。

『大蔵卿』のくだりは、大蔵卿の作り阿呆を中心として、それに常磐御前の本心を探ろうとする吉岡鬼次郎夫婦の苦衷を織り込んだもので、『鬼一法眼三略巻』の本筋からは、ちょっと横道に外れたものであります。全五段の他の各段から離れて、この四段目だけを独立したものとしても決して差支えはありません。檜垣から曲舞、奥御殿のこの三場で、立派に一とつの狂言にまとまっているのであります。『鬼一法眼三略巻』と云う本家を『菊畑』の方へ譲ってしまって、更に『大蔵譚』と云う別家を新しく立てたことは、伶俐な行き方だと思います。

さて、いよいよ『大蔵譚』と云う狂言に就いて、今度の東京劇場のを見た感想、并にそれに関連した大蔵卿の味と云ったようなものを述べて見ましょう。

檜垣茶屋、曲舞、奥御殿の三場ともに、大蔵卿は実に好い心持に芝居の出来るように組立てられ、書かれた浄瑠璃であります。歌舞伎狂言に移されて、多少の訂正や潤飾はあるとしても、何処までも院本趣味の芝居であります。大蔵卿に扮する俳優も、何処までも此の院本趣味を失わないように、面白く芝居をして呉れなと困ります。

団十郎の演じた大蔵卿は、例の活歴癖から大分この狂言の院本趣味を薄くしたように聞

いています。実地に見ない私は、兎や角とあげつらうべき資格を有していませんが、これまでに舞台で見た大蔵卿の中では、吉右衛門のが一番面白いと思いました。

中車のは堅実でも面白くない大蔵卿でした。宗十郎や勘弥の大蔵卿にも、何んだか喰い足りないところがありました。その中で、吉右衛門のは院本趣味があって面白いと思いました。

今度の菊五郎の大蔵卿には大分期待と、同時に疑惧とを抱いて見物しました。期待と云うのは吉右衛門の売物になっている役だけにそれ以上あつと云わせようと云う例の抱負と研究と努力が見ものだと思ったからです。疑惧とは、この前の『伊賀越』の重兵衛のような、芝居を離れた理屈に捕われはしないかと云う疑問と心配とでありました。

ところが、実際舞台にあらわれた菊五郎の大蔵卿を見ると、その期待と疑惧とがごっちゃになったような、変な感想に沈んでしまいました。

『俺のを見よ！』と云う意気は十分受取れました。『うまい役者だなア。』とは思いました。併し『これが一番面白い大蔵卿だ。』とは思いませんでした。

一言にして云えば舞台が淋しいのです。理屈と写実味とに捕われ過ぎているのです。院本趣味の豊かな芝居をして呉れないのです。あれではチョボの要らない芝居を見せているような感じがしてならないのです。

先ず檜垣茶屋の場に、門から姿をあらわした大蔵卿、あすこは、ぱつと派手に浮き立った感じを見物に与えないと損です。作り阿呆のお公卿さまとして、もっと顔の紐が解けていなくてはならない。あんなに淋しく、渋く引締めると云う行き方では、晴れやかな屋外の空気と調和しないと思います。

舞の真似をしながら歩くうちに、履が片足脱けたのも知らずに行くと言うようなことや、鬼次郎と顔を見合せても、表情を変えずにスタスタと揚幕の方へ歩んで行くと言うようなことはひとつの理屈はあろうけれど、あれでは寧ろ放心家に近い。大蔵卿の粧っている阿呆は、放心家でなくて足りない方の阿呆であります。随って陽気に派手に動いて阿呆らしく見せると云うことが、この芝居の本筋ではありますまいか。

曲舞のくだりも、踊りにならないようにさらさらとかたづけています。併し、此処はいやでも動かなければならないように出来ていますから、そんなに淋しくもありません。それに、饅頭のくだりや、蠅のくだりを手際よく見せていますから、多少陽気には見えましたが、でも、じっと見ていると、大蔵卿の作り阿呆のいたずらではなくて、六代目の人を喰ったいたずららしく見えるから不思議なものです。

此処の金襴が、大蔵卿の館としては何んだか淋しいように感じました。

奥御殿の道具は白匂欄ですが、やはり黒の方が古典劇らしい味があって、うつりが好いように思います。

此処で作り阿呆から本心に戻って見せるところが大蔵卿の山であります。だから、檜垣茶屋にしろ、曲舞にしろ、出来るだけ阿呆をつくして置く方が面白いのです。その方が芝居としてぐつと引立つ訳であります。

物語になって、菊五郎の大蔵卿は立派に動いて場を引き締めました。実力です。ここだけは面白いと思いました。

ここで引き抜いたり、又物語の後に元の阿呆に戻ったりするのが普通の型ですが、派手を避くる菊五郎は、それ等を省略していました。尤も、団十郎の型も大分参酌さんしやくしていると云う話です。